平成19年度　第１回武道研究会報告
ドイツ柔道連盟派遣クラブチームの本学における活動とドイツ柔道事情

濱田初幸*

Activities of a club team from the German Judo Federation (Deutscher Judo-Bund) at our university and the state of judo in Germany

Hatsuyuki HAMADA*

Abstract

Members of the Judo-Kokoro Club, which belongs to the Königsbrunn Police Sports Association (Polizei-Sportverein Königsbrunn) in Bavaria (Freistaat Bayern), visited the National Institute of Fitness and Sports in Kanoya as well as the city of Kanoya with the support of the Deutscher Judo-Bund (DJB), and engaged in exchanges through judo from 3rd to 9th April, 2007.

Various information regarding judo in Germany, such as its actual condition and operation methods, was obtained through interviews and lectures by German judo instructors. In particular, we were able to closely examine systems that do not exist in Japan, such as Judo Bundesliga and coaching qualification system in Germany.

In addition, numerous differences were observed with regard to the rank promotion system, rank promotion examination methods, and teaching methods. Through these observations, we were able to identify issues in Japan, which, as the founder of judo, has undertaken the mission of contributing to the further development of judo as it undergoes internationalization.

Furthermore, with the cooperation of the local judo association, team members were given opportunities to interact with Japanese culture through exchanges such as actual practice and social gatherings, and were able to experience meaningful activities during their training camp.

We must continue to contribute to the advancement of regional martial arts by promoting international exchanges through judo.

KEY WORDS : judo in Germany, sports association, rank promotion system, coach qualification system

Ⅰ．はじめに

ドイツ・ミュンヘン近郊ケーニヒスブルン警察スポーツクラブ（Polizei-Sportverein Königsbrunn）に所属する「心柔道クラブ（Judo-Kokoro Club）」17名が，４月３日から９日までの間，本学を拠点に鹿屋市に滞在し，柔道を通じて国際親善交流を行った。

ドイツは，柔道大国フランスと並び世界の柔道強豪国として古い歴史と実績を有し[1)]，アテネオリンピックでも金メダル１個（女子57kg級）を含め４個（銅メダル３個）のメダルを獲得し，「柔道競技各国・地域メダル獲得数」世界５位にランクされるなど[2)]，柔道が普及し浸透しているヨーロッパの中でも牽引的存在である。

スポーツクラブ組織の先進国として知られているドイツにあって，「心柔道クラブ」は警察学校内（V.Bereitschaftspolizeiabteilung）に柔道場が設

*鹿屋体育大学伝統武道・スポーツ文化系

けられている特殊なケースであり，地域行政と柔道関係者・指導者が相互に理解し，良好な協力関係から創設されたクラブである。一行は指導者ハーネス・ダックスバッハ夫妻と女性５名を含む15歳から36歳までのメンバーで，合同練習や交流試合，セミナー等を実施した。以下に，クラブチームが来鹿するに至った機縁と交流の様子やドイツ人指導者による講演，また聞き取り調査によって知り得たドイツ柔道界の現状や課題について報告する。

Ⅱ．来学の機縁

筆者が2005年５月から９月までの間ドイツへ留学（海外先進教育研究実践支援プログラム）した際に，今回の団長・ドイツ柔道連盟委員であるハーネス・ダックスバッハ氏と出会ったことが発端である。ダックスバッハ氏は柔道六段で，警察学校の柔道・護身術教官として勤務するかたわら，ドイツ柔道連盟において指導者育成プログラムや昇級昇段規定の作成・審査活動，また，ドイツナショナル警察柔道チームの監督などの要職に就き，連盟の中枢を担っている人物で，柔道家である夫人のレッジーナ（柔道六段）共々親日家としても知られている。二人は日本の歴史，文化などにも精通し，指導理念として武道精神や柔道精神を敬愛している柔道家であり，クラブチーム名も日本の心・柔道の心を大切にしたい思いから「心柔道クラブ」と命名したとの由である。

筆者とダックスバッハ氏はベルリンやケルンで開催されたドイツ国際合宿等において，共に講師として柔道実技指導を担当し，また，彼の招待により「心柔道クラブ」で直接指導を行ったことなどから親交が深まった。

氏は予てより，日本遠征の強い希望を持っていたが，去年の秋頃から「鹿屋で合宿をしたい」との依頼が度々あり，本学，鹿屋市及び肝属地区柔道会の了承を得て実施されたものである。

Ⅲ．ケーニヒスブルン警察スポーツクラブの紹介

心柔道クラブがあるケーニヒスブルンはドイツ・バイエルン州ミュンヘンの北西に位置し，観光地として有名なロマンティック街道最大の都市アウクスブルグに隣接した人口約３万人の市である。

ケーニヒスブルン警察スポーツクラブ全体を統括する会長は，ケーニヒスブルン市副市長が兼務し，総勢約700名がメンバー登録している。同スポーツクラブは「柔道」，「テニス」，「射撃」，「バドミントン」，「陸上」の５種目から構成されている。

心柔道クラブは，ケーニヒスブルン警察学校（写真１・２）の広大な敷地の中央部に建立され，道場周壁はガラス張りで仕切られていて，モダン

写真１．警察学校

写真２．警察学校訓練所

で清潔感溢れる建物で，その広さは約200畳を有している（写真３・４・５）。

写真３．心道場

写真４．心道場

写真５．心道場

この柔道クラブは24年前からダッグスバッハ氏を中心に活動を開始，現在は約350名がメンバー登録され，同氏が会長・監督の要職に就いている。レッジーナもコーチとして夫唱婦随で指導に当たっている。

夫妻はドイツ国内において全てのスポーツ指導者に必要なコーチ資格の内，ハイレベルな資格である「ディプロムトレーナー」（５段階あるコーチレベルのレベル４に相当）を取得している。他にもコーチＢ（コーチレベル２）を取得している者が３名，コーチＣ（コーチレベル初級）を取得している者が11名在籍し，指導に当たっている。

クラブの柔道の実力としては，「ドイツ柔道ブンデスリーガ（７階層からなるドイツ国内クラブリーグ戦・体重別団体戦)」の内，州レベルのランディスリーガに所属し，中レベルの技量を有していると言えよう（図１)。クラブ所属有段者は６段・２名（ハーネスバッハ夫妻)，２段・４名，初段・20名で活動の中軸を担っている。

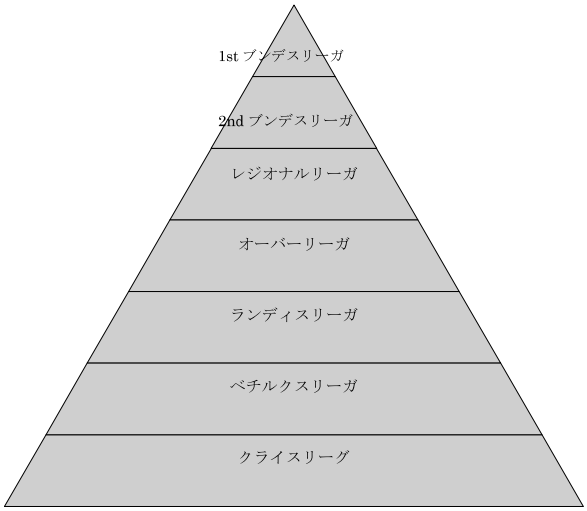

図１．ドイツ柔道ブンデスリーガ

Ⅳ．実施内容

ドイツ柔道クラブの活動内容は，表１の通り実施された。

表１．交流日程

4月	3日(火)	4日(水)	5日(木)	6日(金)	7日(土)	8日(日)	9日(月)
AM		9～10時 学長表敬訪問	休養	実技講習会 9～11時	交流試合 9～12時 (鹿屋市武道館)	交流試合 9～12時 (鹿屋市武道館)	出発 6時
PM	到着 10時	稽古 3～5時	稽古 3～5時	鹿屋市長表敬訪問1時・ドイツ指導者による講演会4～6時	稽古 3～5時 フェアウェルパーティー6時～	鹿児島市内・桜島等視察	

今回来学したメンバーは実力的には決して高いレベルではなかったが，基本に忠実でヨーロッパ特有の変則柔道はみられず，しっかり組んでから

柔道を行っていたのが印象的であった。アテネオリンピックにおける日本柔道選手の活躍（金メダル８個・銀メダル２個）が[3)]，ヨーロッパ各国の選手に，自らの柔道スタイルについて警鐘・自省を促す機運をもたらし，日本選手が取り組んでいる「両手をしっかり掴んで技をかける柔道」へと欧州の選手達が変換しつつある傾向が見られるようになってきた。

これまで，彼らが得意としてきた「肩車」や「双手刈」等の奇襲技の限界を感じつつある様子で，日本の柔道スタイルを吸収しようとする姿勢が強く窺えた。オリンピックで勝つことが，どれほどの効果，影響力があるのかを知ることができる。

柔道の精神性を含めて，柔道の創始者・嘉納治五郎師範の目指した柔道への回帰が技術的にも見られ，柔道ルネッサンス活動（全日本柔道連盟・講道館との合同プロジェクト，創始者・嘉納師範が目指した柔道への回帰運動）が国内に留まることなく西欧諸国にも伝播している一端に触れることができ，本学学生にとっても，柔道の国際化の動向を肌で感じることができ，良き学習の場となったことだろう。

心柔道クラブから筆者への要望で，「背負投」・「巴投」を中心とした実技講習を行い，柔道の基本動作，応用動作を指導する機会を設けた。その中でも，両手を持って技をかけることが技の基本であり，その大切さを強調した指導を行った（写真６・７・８・９）。そうすることが，「心柔道クラブ」，ひいては「ドイツ柔道」の発展に繋がると確信を持っているからである。

写真６．実技講習会

写真７．実技講習会

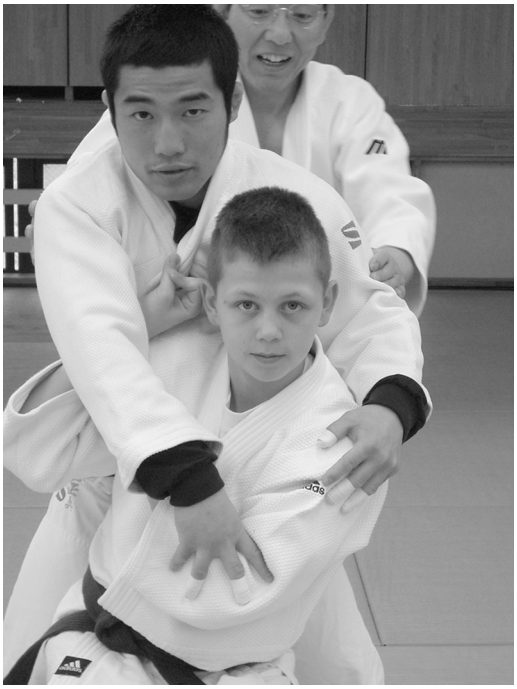

写真８．実技講習会

写真９．実技講習会

また，一行は芝山秀太郎学長や（写真10・11・12）鹿屋市役所を表敬訪問し（写真13・14・15），地元肝属柔道会との合同練習会，交流試合（写真

写真10．学長表敬訪問

写真14．鹿屋市長表敬訪問

写真11．学長表敬訪問

写真15．鹿屋市長表敬訪問

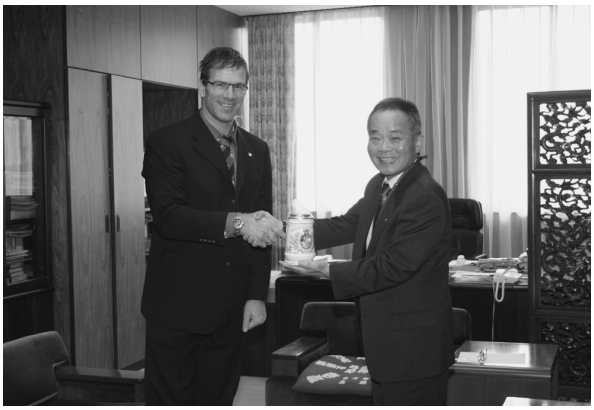

写真12．学長表敬訪問

写真16．合同練習会

写真13．鹿屋市長表敬訪問

写真17．合同練習会

写真18．合同練習会

写真19．合同練習会

写真20．交流試合

写真21．交流試合

写真22．交流試合

16・17・18・19・20・21・22)，パーティーなどを通して鹿屋市民との触れ合いを体験するなど「文化交流」も積極的に行い，有意義な合宿を行うことができた（写真23・24)。

写真23．肝属地区柔道会ボランティアによる昼食会

写真24．肝属地区柔道会ボランティアによる昼食会

Ⅴ．ドイツ柔道指導者による講演会

６日の午後，本学院棟３Ｆ講義室において，柔道国際化における啓蒙教育活動の一環としてダックスバッハ氏に英語による講義を依頼し，本学武道課程学生・教員を対象に，主にドイツ柔道の実態に関する講演を実施する機会を得た（写真25・26・27・28)。なお，通訣者として，鹿屋市市民活動推進課・国際交流員（CIR）サンディ・ファン氏のご協力を頂いた。

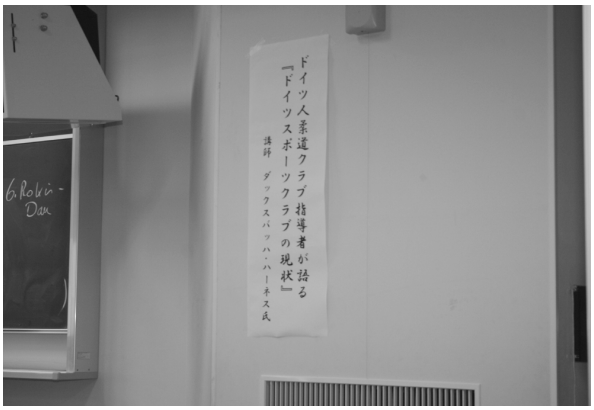

写真25．講演会

写真26．講演会

写真27．講演会

写真28．講演会

さらに，講演会終了後に聞き取り調査を行い，詳細なる情報を収集することができた。

その主な骨子は以下の通りである。

１．ドイツのスポーツ組織

ドイツ柔道連盟（以下DJB）は，ドイツオリンピックスポーツ連盟（DOSB）の傘下に所属している。DJBの会員は200,302人[4]，ドイツ連邦16州を基軸とした18団体から構成され[5]，その傘下に各クラブが存在している。DJBの組織はCompetition（競技），Free time（娯楽），Kata（形），Self－Diffence（護身術）の４部門から構成されている。

心柔道クラブが所属しているバイエルン州柔道連盟（BJV）は８団体・400クラブ・２万５千人の競技者が登録されている。登録人口の内16歳以下の年齢層が70％と高い割合を占めているが特徴である。

２．ドイツにおける体育と青少年の身体活動の現状

１）中等学校では週に２～３時間程度の体育授業があるが，あまり重要視されていない。

２）子供達はあまり身体活動を行っていない（室内でゲーム機で遊ぶ子どもが多くなっている)。

３）身体のバランス感覚に個人差が大きい。

３．ドイツ柔道における段級制度について

１）各級における多彩な色帯について

年齢，技能に応じて初心者の白帯から黄色，緑，青など多彩な８種類の帯色を規定している（写真29)。帯の色を技能向上の進度によって変え，子ども達を柔道から飽きさせないように工夫したもので，ドイツに限らず諸外国で採用されている[6)]。ドイツでは，初段取得のために通常３年から８年の期間を要すると言われ，初段取得によって許可される黒帯を締めることは，容易なことではない。

写真29．多彩な色帯

表２．ドイツの級と色帯・年齢

８級	白－黄	満７歳
７級	黄	８歳（暦年内に満年齢）
６級	黄－橙	９歳（暦年内に満年齢）
５級	橙	10歳（暦年内に満年齢）
４級	橙－緑	11歳（暦年内に満年齢）
３級	緑	12歳（暦年内に満年齢）
２級	青	13歳（暦年内に満年齢）
１級	茶	14歳（暦年内に満年齢）

２）日本とドイツの昇段審査規定の比較

講道館昇段資格に関する内規には，初段の審査方法に関して以下のように記してある。

〇形の修行状況（投の形の内，手技・腰技・足技）及び試合成績と修業年限によって評定するものとする。

日本において，通常行われている初段審査方法は上記の規定を基に，学科試験・試合・投の形を行い，数名の審査員の審議によって合否判定を行う。

一方，ドイツにおいては，以下のような詳細な規定によって審査が行われている。

表３．ドイツにおける初段試験実技規定①

形	立　技		総　合	
	投技の示範	総合課題	固技の示範	総合課題
投の形	＊五教の技・５種技以上・片方だけ ＊五教の技・５種技・左右 ＊五教の技以外で５種技・実践的な動きの中で	＊５種の連続技 ＊５種の後の先の技 ＊得意技に関して実演し，その原理を説明し練習方法，実践的攻撃方法	＊４種技の抑込技を異なる３方法で ＊７種技の関節技を異なる２方法で ＊７種絞技を異なる2方法で；すべて実践的な状態の中で	＊立技から固技に4方法で ・受の攻撃の後固技に２方法・取の攻撃から固技に２方法 ＊四つんばいの受に対する６方法・正面から2方法・後ろから２方法

表４．ドイツにおける初段試験実技規定②

技術と戦略の示範
立技における得意技を打ち込み，投げ込みなど練習方法を実演し説明する（５－10分間）

表５．ドイツにおける初段試験実技規定③

柔道護身術
柔道を基にした護身術技を示範し説明する（５－10分）

上記の初段審査方法を基準として，２段，３段，４段と上位昇段に従って技種類，施技回数が増え，より複雑化していく。また，初段，二段においては講道館柔道投技指導要目である「五教の技」が適用され，それより上段においては除外され自由技になる。さらに試験員による口頭質問に対しての解説や技理論の説明を求められるなどの特徴がみられる。

ドイツにおいては，立技・固技・連続技が細かく分類され約束練習として，実際に実技示範できるか否かを問う試験内容が主軸となっている。

講道館の規定では試合・実践を重視して合否が

決定する傾向が見られ，ドイツ昇段審査規定と大きく異なることが窺える。

３）段級位とトレーナー資格との関係

ドイツ国内において，柔道指導者として活動するためには，前述のごとく，トレーナー資格を取得しなければならない。トレーナー資格取得のためには，厳格な試験に合格しなければならないが，その試験を受ける為の事前資格として，柔道の段級取得が前提条件として課せられている。

ダックスバッハ夫妻が取得しているディプロムトレーナー（Coach Level 4）の受験資格は二段以上を有していて，コーチＡを既に取得し，なおかつDJB から推薦された者に与えられる資格で，厳選された極少数者が選出され，その資格を有している（実際には国際大会での競技実績やコーチ実績を有している者が推薦されている)。

表６．コーチ受験資格と段級位の関係

コーチレベル	柔道段級
コーチＣ	一級以上
コーチＢ	初段以上
コーチＡ	二段以上
ディプロムートレーナー	二段以上

４．ドイツにおける柔道の普及と課題

１）青少年が柔道の稽古ができるのは，普通，週のうち１～２回程度であり，日本のように多く稽古をしない。

２)「柔道形」のニーズが急速に高まり，国内及び欧州形選手権大会が毎年実施されている。

３）国内に高度な技能を有する，質の高い指導者を得ることが重要な課題である。

４）柔道を通してマナー，コミュニケーションの仕方を教えていかなければならない。

５）約20万人の会員の内，70%が16歳以下で構成されており，柔道を継続する者が少なく短期間でやめてしまう傾向が見られ，以前からの大きな課題になっている。

ダックスバッハ氏によるエネルギッシュな講義は，多くの実例を挙げながら現状と課題に関する内容を網羅し，聴衆を十分魅了するものであり，学生たちは真剣な眼差しで興味津々耳を傾けていた。終了後，質疑応答の際も活発な意見交換が行われ，盛会裏に終了した。我が国とドイツにおける様々な違いを知り，柔道の国際化，我が国と大きく異なるドイツ柔道界の段級位制度など普段触れることのない貴重な学習の場となり，多くの知見を得ることができた。

Ⅵ．最後に

筆者が２年前にミュンヘンに赴き，心道場を初めて訪ねた時，最初に行った指導は「道場の履物の整理整頓」をさせたことであった。勿論，文化の違いを承知の上での指導であるが，この道場の子ども達のマナーに履物を揃えるという習慣はなかった。そこで私は，「日本では正しい柔道ができるかどうかは，道場を見ればわかる。ゴミが散乱していたり，履物を揃えていない様な道場からいい選手が育ったり，いい技が身についたりすることはない。履物を揃えることはマナーであり，柔道場での基本中の基本である」と話をした。

滞在中，彼らは本学宿泊研修センターの宿泊所だけでなく，どこに行った時も履物を当たり前のように整然と揃えていた。ダックスバッハ氏によると，筆者の帰国後，この助言を徹底して指導したとの由である。口を酸っぱくして伝えたことが無駄ではなかったこと，日本人として大切にしていることが，文化の異なるドイツ柔道家達に受け入れられ，理解され，実践されていることに感動とささやかな充実感を感じた一瞬でもあった。

また，肝属地区柔道会主催の交流会謝辞の中で，ダックスバッハ氏から「ニトベイナゾウ（新渡戸稲造)」の「ブシドウ（武士道)」に関する話や戦国武将の名前が次々と語られた後に，「柔道を愛する者の心は言葉を超えてイシンデンシンノココロ（以心伝心の心）でわかる」とお礼の挨拶を述

べた。我々日本人でさえ，普段あまり使わない難解な言葉を，ドイツ柔道家が日本語で披露したことに強い感銘を受けた。

短期間の滞在であったが，柔道の持つ国際性の魅力を改めて実感すると共に，本学学生が異文化交流を体験する貴重な機会を得たことは何よりの収穫でもあった。ドイツ柔道家も関係者の暖かい「もてなし」を受け，柔道と鹿屋を十分満喫し無事帰国の途に着いた（写真30・31）。

柔道通し日独交流

肝属地域の子供たち一緒に汗

ドイツ・心柔道クラブ迎え

鹿屋武道館で行われた日独の交流試合

鹿屋体育大学で合宿していたドイツ・ミュンヘン近郊のケニングスブルン警察にある「心柔道クラブ」と肝属地域の小中高校の柔道部員ら約七百人が、鹿屋市武道館で柔道交流会を開き、日独の親善を深めた。

肝属地域からは肝属地区柔道会、市内の柔道スポーツ少年団、中学校や高校の柔道部、鹿屋体育大学柔道部ら総勢約百人が参加。午前中は打ち込みや乱取りなどで一緒に汗をかき、昼食時間には外で満開のサクラを見ながらドイツチームの選手らと子供たちがカレーライスを食べた。満開のサクラにドイツの選手らは「きれいですね」などと英語とドイツ語で語り、感動した様子。

午後の部は、心柔道クラブ対中高生を中心としたチームで親善試合が行われ、後半には子供たちが盛を叩きながら応援し、試合は最高に盛り上がった。

二月の日仏親善柔道交流に引き続き子供たちは貴重な体験をし、大きな財産となったようだ。

鹿屋体大の濱田助教授と心柔道クラブが記念品を交換

南日本新聞 2007.4.12

写真30．交流に関する記事が新聞で報道される

Tischtennis in Zahlen

Begeistert zeigte sich die Gruppe der Judoabteilung des Pölzer SV Königsbrunn von ihrer Japanreise (siehe kreiend von links): Severina Frimmer, Alina Pschibul, Emilia Jaser, Juliane Freiesleben, Hotsuyuki Hamada, Daniel Backmann, Michael Rothmundl, Regina Dasbacher, (stehend von links) Hannes Dasbacher, Joe Michael König, Valen Dick, Melanie Breitsameter, Stefan Wegmann, Georg Benka, Alexander Schreiber, Said Farschtschi, Christian Frank und Arthur Sepple.

自他共栄

Härte mit viel Höflichkeit

Königsbrunner Judoka auf großer Japanreise – großer Erfahrungsschatz

Von unserem Redaktteur Reinhold Radloff

Judozentrum trainieren wir mit über 350 Japanern und lernen dort den Olympiasieger von Atlanta (bis 100 kg), Kiyoi Inoue kennen. Unsere Athleten staunten nicht schlecht, wie hart, konzentriert, stützte sie und sprach sich wie viele andere auch dafür aus, sofort Verbindungen wachsen zu lassen, sowohl im kulturellen als auch im sportlichen und schulischen Bereich.

Gesund, glücklich und mit vielen neuen Erfahrungen kehrte nach zwei Wochen die De-

写真31．ドイツ地元新聞記事

本研究によりドイツ柔道の実態や課題を浮き彫りにすることができ，これからの指導法や昇級昇段制度，指導者資格制度，国際交流のあり方等に関して多くの提言や示唆を得ることができた。

今後もこのような国際交流の場を学生，鹿屋市民に提供し，本学の使命である国際貢献に寄与できるよう尽力していく所存である。

最後に，この場を借りて協力していただいた本学，鹿屋市，肝属地区柔道会等関係各位に感謝の辞を述べ，報告とする。

なお，本原稿は，『蒼天』第195号（3）「ドイツ柔道連盟クラブチームと本学との交流」を基に，第19回トレーニング科学会において発表した「ドイツ連邦共和国における柔道昇段審査方法を探る」及びドイツ柔道家滞在中に実施した「聞き取り調査」により収集した資料・情報を参考に加筆修正したものである。

Ⅵ．参考文献

1）講道館（監修），『嘉納治五郎大』，第12巻，本の友社，pp.164-171，1988.

2）第28回オリンピック・アテネ大会柔道競技，『近代柔道』，26(10)，pp.62-67，2004.

3）佐藤温夏，アテネ五輪大会総括，『近代柔道』，26(10)，pp.56-57，2004.

4）DEUTSCHER SPORTBUND(2005)，『Jahrbuch des Sports 2005・2006』，Niedernhausen/Ts，S.80-81.

5）同上書，S.392-394.

6）濱田初幸，『柔道大国・フランスの実態を探る』鹿屋体育大学学術研究紀要第34号，pp.49-62，2006.